

《札幌地域イオル再生事業ライブラリー調査聞き取り》

【話者】 K. Sさん

- ・深川で生まれたがすぐに石狩生振に来る。
- ・父は（A. Iさん）アイヌ、母（K2さん）は和人に育てられるが、父方の母（Kさんの祖母：Hさん）にも育てられる。
- ・父方はすべて石狩アイヌ（A家）である。

Kさん : Hばあちゃんに聞いたアイヌ語は「ワッカエンコレン（水を私にください）」しか知らない。

聞き手A : おばあちゃんって、お父さんのお母さん？

Kさん : 私の父のお母さんだから、ばあちゃんさ～。

聞き手A : おじいちゃんとおばあちゃんは、何してたか覚えてる？

Kさん : 何してたかって聞かれても、あんまりわかんないよ～。でも、鮭獲ってたりして暮らしてたんじゃないの。

聞き手B : Kさんは、じゃあ生振で生まれて？

Kさん : 深川っていうところで生まれた。生まれたっていうだけで、すぐ札幌に来たの。札幌だって父親はなんもね、仕事しないでね、2年間戦争にもとられたけど。それからまた札幌にも来て、なんも働くところないわけでもないんだろうけど……炭鉱でも働いてればどうなっていたんだろうね。

聞き手A : お父さんはアイヌだったんですか？お母さんは？

Kさん : 父親はアイヌらしいけど、母親はシャモ（和人）みたいだったわ。父親も母親も、ルーツを私にはしゃべらないんだわ。

聞き手A : 深川から札幌に来たのは、何歳の時ですか？

Kさん : 赤ちゃんの時で……まだ学校行かない時じゃないの。小さい時に父親は……何で死んだか知らないけど早く死んだらしいし、母親は再婚したらしいから。一家の主ってね、一所懸命働けばね、みんなを幸せにするっていう諺もあるけど、父はなんも働かなかった。

聞き手A : 札幌へ来てお父さん働かなかったら、どうやって生活していたの？

Kさん : その日暮らしさ。それから何年も兵隊にとられたから。

聞き手A : じゃあ、お母さんが何かしてたの？

Kさん : 人に熊（木彫り）彫ってもらって、それ小売して歩いて生活してたんじゃないの。父親は、昔は熊彫るだけでなんもしなくて、母親は函館まで熊売りに歩いてたらしいよ。父のIはあんまり……熊を彫るんじゃなく、壁掛けとか彫ってたよ。

Kさんの夫 : Sちゃん（話者Kさん）のいところで、S.Sさんっているんだ。新琴似にいるんだ。Sちゃんのいところにあたる人は、なんでも知ってるんじゃないかな。

聞き手A : 私が支部（現・札幌アイヌ協会）に入ったころ……昭和53年の会員名簿見つけたら、KさんもS2さんもみんな入ってた。

Kさん : 私の父親は本当に働かなかったけど、熊彫りとかはやってたんだ。桑園で。

Kさんの夫 : Sちゃん（話者）からは、なんも参考になるようなことはないよ。

聞き手A : 別にいい話じゃなくても、育った環境とかKさんが思ったことや覚えてることをお聞きできれば……。

聞き手B : まず小さいとき……物心がついたときからまずアイヌだということは聞いて、自分でもわかっていたんですか？

Kさん : 生振から山鼻に行って育って……山鼻はアイヌだって馬鹿にする人はいなかったわ。生振にずっといたかったんだけどね、電気もないところにまた行ったんだよね。

聞き手A : そのころ生振には、アイヌはたくさんいました？

Kさん : TとK3しか覚えてないな。K4って浜益から来たアイヌは知ってるけど……3軒しか知らないわ。K4ってのは私のお姉さん。米一俵担いだ女ってことで有名だったんだ。

Kさんの夫 : 生振の人はみんなアイヌを馬鹿にしてたらしいし、みんなそう言ってるよ。馬鹿にされて馬鹿にされて、「アイヌが来たぞ！アイヌが来たぞ！」……ってね。K4も馬鹿にされて……石狩ではいいニュースはないよ。暗いニュースばかりだよ。

聞き手A : でもまあ、それが歴史だし。その時代のことも聞くだけで違うと思うし。

Kさん : 私の両親はロクなもんじゃないんだわ。そういう話題しかないわ。

聞き手A : だからかなり苦労したんでしょ？Kさん、小学校とかどこに行ったの？

Kさん : なんも普通学校行ったら、親と手繋いで行くでしょ？それが行かないんだわ。それがうちのK2（母）はなんもね、行かないんだわ。だから1人でね、行くのは行ったさ。小学校どこかはわからない。それっきり。

聞き手A : 山鼻小学校？何日間かは行ったの？

Kさん : そう、本当に何日間かは行ったの。うちの母K2は学校に行かせたくなかったんじゃないの？

聞き手A : じゃあ、お家でお手伝いしてたの？

Kさん : お手伝いだって、することあるわけないっしょ。

聞き手A : S3さんとはいくつ違うの？

Kさん : 2つ。私が昭和〇〇年（10年代前半）で、あっちが昭和〇〇年（10年代前半）生まれ。あと兄弟3人いるんだけど、私小っちゃいからよくわかんないんだわ。

聞き手A : 学校行かなかったってことは、何かお手伝いあったから行かなかったのかな？

Kさん : 学校にやりたくないんだ、あの母親は。男の兄弟は、みんな学校に行って……私に厳しかったんだわ。暴力を振るわれたし。

聞き手A : 家庭で大変だったのかな？

Kさん : お父さんとお母さんはいとこどうしだったの。喧嘩がひどくて大変だったの。

聞き手A : 親が喧嘩するって、子どもにとったら不安だよな。Kさんは長女だもんね。大変だったね。じゃあ、いつごろから家のお手伝いするようになったの？

Kさん : 私はどこもなんも……学校も行かないから、大きくなって熊彫りやったさ。そのころ熊は売れたから、自分で働いたお金で飛行機に乗せて、阿寒に旅行連れて行ってあげたの。

聞き手A : そのころ、熊は売れたんだ。

Kさん : こんな小っちゃい熊ばかり作ってね。学校でも出ていればきちんと働けばいいんだろうけど。熊彫りなんかやらなくてもいいんだけど。熊彫りとは結婚したくなかったんだ。

Kさんの夫 : でも熊売れた時代は、良かったんじゃない？民芸品売り場でも、熊彫り売り場ってあったから、あのころは良かったんじゃない？

聞き手A : じゃあ、結婚するまでお家で手伝ってたの？

Kさん : うん。せめて中学くらい出ればね、どっかこっか就職できるんだろうけど。

聞き手A : 学校行って読み書きできればかなり違うよね。いろんな役所行っても、手続きだとかね。

Kさん : 昔は小学校しか出てなくても、努力すれば大きなところに勤められたんだね。今ならありえないよ。上の学校出なきゃ勤めれないしょ。

Kさんの夫 : 私があんまりアイヌって言っちゃダメだと思うけど、うちの娘もアイヌ恥ずかしがるし、K5さんの息子のS2さんもアイヌって恥ずかしがるし。

Kさん : K5さんが亡くなった時も、アイヌが来たら恥ずかしいから来ないでくれって言われたし。私たちも行かなければ良かったんだけど。そのお葬式でも、私には「写真に入らない？」……って尋ねられなかったから、「ああきっと写真を写したら恥ずかしいんだな」……と、あとから気がついたよ。

Kさんの夫 : Sちゃん（話者）の父親（A. N、2番目の父）が亡くなったとき、T2さん葬儀委員長やったんだよ。36歳で。そしてSちゃんが葬儀委員長なんだから、しっかりしなさって言ってやったんだ。

Kさん : 役に立たない人間は、早く死んだほうがいいんだわ。父のIも早く死んだから。43歳で死んだ。家族のために、なんも働かないし。K6の父親もそうだ。

Kさんの夫 : Sちゃん（話者）の家系は脳梗塞になる家系なんだわ。

聞き手A : そういう病気って遺伝するし、体質似るしね。

Kさん : ビートたけしの母がね、貧乏を脱出するには学問しかないって……そう教えたんだと。だから長男・次男とも東大と明治大出てるし……立派なお母さんだね。

聞き手A : Kさんだってそうでしょ。立派にお子さん大学出て、教育したでしょ。

Kさん : 親の真似はしたくないと常日ごろ考えてたんだ。そうだべさ〜、私の親は子ども生むだけの親だったんだ。

聞き手A : でもお母さん、木彫りの熊売ってきちんと育てたんでしょ？

Kさん : 育てたって、私、小さいころから美味しい物ひとつも食べた記憶ないよ。肉なんて食べたことないよ。卵も食べた覚えないよ。兄弟には食べさせてみたいだけ。兄弟はK2（母）に叩かれたこともないみたいだね。

聞き手A : 今でも少しあるけど、やっぱり男の子のほうが大事にされたしね〜。

Kさん : うちの父Iは学校もロクに出てないみたいだけど、新聞だけは必ず読んでたよ。でも、どうもならない親だったね。親にも、「なして私のことばかり叩いたのさ？」……って聞いたら、一番上だからなんだとさ。

聞き手A : よっぽど苦労したんだね。

Kさんの夫 : 悪いことばかりでもないみたいだよ。2人で登別温泉にも行ってるし。

Kさん : そのころ定山溪に鉄道乗って行ってた。熊の木彫りもたくさん買ってもらったって。温泉もすごくお客さんいたね。

聞き手A : 木彫りは……じゃあ誰に習ったの？

Kさん : あんなの誰にも習わなくてもできるんだ。

Kさんの夫 : Sちゃん（話者）の父Iさんは、八雲で習ったって言ってたでしょ。ウタリ協会の機械だってスイスから輸入してるって話だし。今、フクロウの木彫りが流行ってるけど、一番最初にしたのはSちゃんのところの……阿寒でM.Yさん（アイヌ）がしたって。あと、あちこち近所にアイヌもたくさんいるよ。そこのスーパーでもいるし、病院にもいるし。

Kさん : 大体アイヌは、アイヌに話しかけられるの嫌がるんだわ。

聞き手A : きっと嫌な人とそうじゃない人というよ、きっと。

Kさんの夫 : だから……Sちゃん（話者）から話しかけなさいって言っても、こう言うんだわ。意外と引っ込み思案なんだわ。知ってる人とは元気に前向きに話すんだわ。尊敬できる人には元気に話すんだわ。それ以外の人にはダメだわ〜、えぼっちゃって。

聞き手B : ご主人は、前からアイヌのことはご存知だったんですか？

Kさんの夫 : Sちゃん (話者) ほどじゃないけどね～。

Kさん : ほんとにアイヌも、みんなきちんと学校にやってほしいね。

聞き手A : そうだね。

Kさん : 私の母みたく学校にもやらないで……自分学校やらなかったんだね、情けない話だね。

聞き手A : 教育って大切だよな。Sさん (話者)、結婚してからはお仕事した？木彫りは一緒にしたことあったしょ？あと、ほかになんかしたことあった？

Kさん : 家具屋でちょこっと働いたことあった、潰れたけど。売ってたんじゃなく下働きみたいなのやった。そしたらそこで働いてた人が、私がアイヌだってことみんなに言ったんだわ。そしたらみんなで……アイヌは馬鹿にされてるんだって言われて、馬鹿くさいからそこ辞めたんだわ。こつたらとこで働きたくないなって。

聞き手A : そのあとは専業主婦？

Kさん : 丸高水産でも働いた。そこもちょこっとしか働いてない。

聞き手A : でも、アイヌのあれって好きでしょ？アイヌ協会にも入ってたし。いろんな儀式とかイベントとか出てるもんね。

Kさん : 聞き手Aさんのところは立派だね。きちんとお子さん学校出してるでしょ。

聞き手A : やっぱりウタリの資金あったから、できたよね。

聞き手B : Kさん、木彫り誰にも習わなくてできるようになったのが、すごいですね。

Kさんの夫 : Sちゃん (話者)、熊しかないもんね。他のもの作れないもんね。

聞き手A : S3さんのところのお父さんが彫ってたのは知ってたけど、Kさんが彫ってるなんて知らなかった。

Kさんの夫 : (アルバムを見ながら) そのうち、熊彫ってるところの写真出てくるわ。

Kさん : 木彫りじゃなく、アイヌの人たちもきちんと学校にやらないとダメだ。あと、私の母親の弟ね、石狩からシャモ (和人) の子どもをもらいっ子したんだ。子どもいないか

ら。そうしたら、アイヌが恥ずかしいとかって言った。私の従兄弟とくっついて、
今、札幌にいないみたい。アイヌも一生懸命、学校にやってほしいね。